

## 第6章 問題6-4

【問1】②：（ア）正（イ）誤

ア) X2年度のA社の現金及び預金の貸借対照表構成比率 $9.7\% = \text{現金及び預金}90,000 / \text{資産合計}923,800 \times 100$

イ) X2年度の流動資産の貸借対照表構成比率はA社（40.5%）の方がB社（51.7%）よりも低い。

\* X2年度のA社の流動資産の貸借対照表構成比率 $40.5\% = \text{流動資産}373,800 / \text{資産合計}923,800 \times 100$

\* X2年度のB社の流動資産の貸借対照表構成比率 $51.7\% = \text{流動資産}50,800 / \text{資産合計}98,300 \times 100$

【問2】②：（ア）正（イ）誤

ア) X2年度の売上高売上総利益率と売上高営業利益率の差はA社（17.8%）の方がB社（16.0%）よりも大きい。

\* X2年度のA社の売上高売上総利益率 $19.8\%$ と売上高営業利益率 $2.0\%$ の差 $= 17.8\%$

\* X2年度のA社の売上高売上総利益率 $19.8\% = \text{売上総利益}178,000 / \text{売上高}900,000 \times 100$

\* X2年度のA社の売上高営業利益率 $2.0\% = \text{営業利益}18,000 / \text{売上高}900,000 \times 100$

\* X2年度のB社の売上高売上総利益率 $33.3\%$ と売上高営業利益率 $17.3\%$ の差 $= 16.0\%$

\* X2年度のB社の売上高売上総利益率 $33.3\% = \text{売上総利益}50,000 / \text{売上高}150,000 \times 100$

\* X2年度のB社の売上高営業利益率 $17.3\% = \text{営業利益}26,000 / \text{売上高}150,000 \times 100$

\* 売上総利益と営業利益率の差は販売費及び一般管理費であるため、売上高販売費及び一般管理費比率を計算することで求めることもできる。

イ) X2年度のB社（33.3%）の売上高売上総利益率はA社（19.8%）の2倍以上ではない。

【問3】④：（ア）誤（イ）誤

ア) X2年度の流動比率はA社（115.0%）の方がB社（168.8%）よりも低い。

\* X2年度のA社の流動比率 $115.0\% = \text{流動資産}373,800 \div \text{流動負債}325,000 \times 100$

\* X2年度のB社の流動比率 $168.8\% = \text{流動資産}50,800 \div \text{流動負債}30,100 \times 100$

イ) X2年度の当座比率はA社（104.2%）の方がB社（152.2%）よりも低い。

\* X2年度のA社の当座比率 $104.2\% = \text{当座資産}338,800 \div \text{流動負債}325,000 \times 100$

\* X2年度のA社の当座資産 $338,800 = \text{流動資産}373,800 - \text{棚卸資産}35,000$

\* X2年度のB社の当座比率 $152.2\% = \text{当座資産}45,800 \div \text{流動負債}30,100 \times 100$

\* X2年度のB社の当座資産 $45,800 = \text{流動資産}50,800 - \text{棚卸資産}5,000$

【問4】④：（ア）誤（イ）誤

ア) A社の自己資本比率はX1年度（50.2%）よりもX2年度（50.1%）の方が低く、安全性が低くなったといえる。

\* A社のX1年度の自己資本比率 $50.2\% = \text{純資産合計}480,000 / \text{負債純資産合計}956,400 \times 100$

\* A社のX2年度の自己資本比率 $50.1\% = \text{純資産合計}462,800 / \text{負債純資産合計}923,800 \times 100$

イ) X2年度の自己資本比率はA社（50.1%）よりもB社（55.0%）の方が高く、安全性はB社の方が高いといえる。

\* B社の2年度の自己資本比率 $55.0\% = \text{純資産合計}54,100 / \text{負債純資産合計}98,300 \times 100$

【問5】②：（ア）正（イ）誤

ア) X2年度のフリー・キャッシュ・フローはA社（22,000）B社（2,000）ともにプラスであるため、両社とも営業活動によるキャッシュ・フローの範囲内で投資活動が行われている。

\* X2年度のA社のフリー・キャッシュ・フロー $22,000 = \text{営業活動によるキャッシュ・フロー}31,000 + \text{投資活動によるキャッシュ・フロー}\Delta 9,000$

\* X2年度のB社のフリー・キャッシュ・フロー $2,000 = \text{営業活動によるキャッシュ・フロー}24,500 + \text{投資活動によるキャッシュ・フロー}\Delta 22,500$

\* フリー・キャッシュ・フローは営業活動によるキャッシュ・フローの範囲内で投資活動を行えば、資金の状況が安定するという考え方を反映した指標

イ) A社の正味運転資本はX1年度（61,400）よりもX2年度（48,800）の方が小さい。

\* A社のX1年度の正味運転資本 $61,400 = \text{流動資産}411,400 - \text{流動負債}350,000$

\* A社のX2年度の正味運転資本 $48,800 = \text{流動資産}373,800 - \text{流動負債}325,000$

【問6】②：（ア）1.8（イ）低い

ア) X2年度のA社の総資本経常利益率 $1.8\% = \text{経常利益}16,500 / \text{負債純資産合計}923,800 \times 100$

イ) X2年度の総資本経常利益率はA社（1.8%）の方がB社（25.4%）よりも低く、この指標からみた収益性はA社の方が低い。

\* X2年度のB社の総資本経常利益率 $25.4\% = \text{経常利益}25,000 / \text{負債純資産合計}98,300 \times 100$

【問7】④：（ア）下回って（イ）劣っている

ア) X2年度の自己資本当期純利益率はA社（1.0%）がB社（5.5%）を下回っている。

\* X2年度のA社の自己資本当期純利益率 $1.0\% = \text{当期純利益}4,500 / \text{純資産合計}462,800 \times 100$

\* X2年度のB社の自己資本当期純利益率 $5.5\% = \text{当期純利益}3,000 / \text{純資産合計}54,100 \times 100$

イ) 自己資本当期純利益率の低いA社の方が、株主の出資に対する収益性が劣っている。

**【問8】④：（ア）誤（イ）誤**

**ア）X2年度の総資本回転率はA社（0.97回）よりもB社（1.53回）の方が高く、B社の方が投下資本総額が効率的に売上高を生み出しているといえる。**

\* X2年度のA社の総資本回転率0.97回 = 売上高900,000 / 負債純資産合計923,800

\* X2年度のB社の総資本回転率1.53回 = 売上高150,000 / 負債純資産合計98,300

**イ）財務レバレッジの変動幅はA社（0.3%）の方がB社（18.7%）よりも小さい。**

\* A社の財務レバレッジの変動幅0.3% = X2年度199.6% - X1年度199.3%

\* X1年度A社の財務レバレッジ199.3% = 負債純資産合計956,400 / 自己資本480,000 × 100

\* X2年度A社の財務レバレッジ199.6% = 負債純資産合計923,800 / 自己資本462,800 × 100

\* B社の財務レバレッジの変動幅18.7% = X2年度181.7% - X1年度163.0%

\* X1年度B社の財務レバレッジ163.0% = 負債純資産合計88,500 / 自己資本54,300 × 100

\* X2年度B社の財務レバレッジ181.7% = 負債純資産合計98,300 / 自己資本54,100 × 100

**【問9】③：（ア）150,000（イ）X1年度**

**ア）A社のX2年度の時価総額150,000 = 1株当たり株価750 × 発行済株式数200**

**イ）時価総額はX1年度（329,400）の方がX2年度（150,000）よりも大きく、株価による企業の純資産に対する評価価値の総額はX1年度の方が大きい。**

\* X1年度の時価総額329,400 = 1株当たり株価1,220 × 発行済株式数270

**【問10】③：（ア）642.9（イ）A社**

**ア）X2年度のA社の従業員1人当たり売上高642.9 = 売上高900,000 / 従業員数1,400**

**イ）X2年度の従業員1人当たり売上高はA社（642.9）の方がB社（227.3）よりも高く、X2年度における労働効率はA社の方が高い。**

\* X2年度のB社の従業員1人当たり売上高227.3 = 売上高150,000 / 従業員数660